

令和元年 安乗神社秋季例大祭奉納

■国指定重要無形民俗文化財

安乗の人形芝居番組



写真：泊 正徳

日時／令和元年 9月 15 日(日) 午後 7 時 00 分開演
9月 16 日(祝) 午後 6 時 30 分開演

※両日午後 5 時から三番叟上演

場所／安乗人形芝居舞台（安乗神社境内）

■主催 安乗神社・安乗人形芝居保存会

■後援 志摩市・志摩市教育委員会・安乗自治会・志摩市観光協会
志摩市商工会・公益財団法人岡田文化財団

■九月十五日午後五時 安乗神社奉納三番叟上演

九月十五日(日曜日) 午後七時開演

一、鎌倉三代記 三浦之助母別れの段《遣い手、語り、三味線》東海中学校郷土芸能クラブ

一、伊達娘恋緋鹿子 火の見櫓の段《遣い手》安乗人形芝居保存会《太夫》船橋美和《三味線》竹本友和嘉

一、絵本太功記 尼ヶ崎の段《遣い手》安乗人形芝居保存会《太夫》船橋美和《三味線》竹本友和嘉

*各幕間に舞踊、幕終了後カラオケがあります。

■九月十六日午後五時 安乗神社奉納三番叟上演

九月十六日(祝日) 午後六時三十分開演

一、戎舞 《遣い手》安乗人形芝居保存会《語り、太鼓》安乗人形芝居保存会

一、傾城阿波の鳴門 巡礼歌の段《遣い手》安乗人形芝居保存会《太夫》船橋美和《三味線》竹本友和嘉

十郎兵衛住家の段《遣い手》安乗人形芝居保存会《太夫》新居和昇《三味線》竹本友和嘉
一、壺坂観音靈験記 山の段《遣い手》安乗人形芝居保存会《太夫》新居和昇《三味線》竹本友和嘉

*各幕間に舞踊があります。

大入叶 千秋寮 ●当日は演目、遣い手に変更がある場合があります。

安乗の人形芝居の歴史

『安乗の人形芝居』は安乗神社の祭礼に奉納する神賑の人形芝居として受け継がれてきた民俗伝承芸能で、昭和五十五年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

言い伝えとして、『文禄元年、豊臣秀吉が企てた文禄の役に参加する際、志摩の国の国主九鬼嘉隆が安乗沖にさしかかると急に逆風が吹いて船が止まってしまいました。嘉隆が安乗神社に参拝し戦勝を祈願したところ風向きが変わり、船は追風に乗って無事出航する事ができ、戦役で武功をたて再び安乗神社に御礼参りに訪れました。村民は手踊りや種々の芸能で大歓迎をしました。』とあります。このときに嘉隆から許された芸能が、幾多の変遷を経て安乗の人形芝居として伝承されています。

当初は儀礼的な三番叟を舞って奉納し、漁船や入港する船の海上安全を祈ったものと推測されます。

大正末期の不況と昭和初期の戦争により一時中断しましたが、昭和二十六年、村民の願いと協力により復興しました。



◆九月十五日

鎌倉三代記

三浦之助母別れの段

三浦之助は戦場で負傷し、病気の母の顔見たさに戻ると、敵方の大将北条時政の娘時姫が看病にきていました。時姫の介抱で正気を取り戻した三浦之助は、一目母親に会おうとしますが、戦場より三浦之助が戻ったと知った母親は「我が子には忠義を大切にするよう教えた。そんな未練がましい事をする子ではない。」と顔を合わせず口説きます。母親の思いに気付いた三浦之助は、再び戦場へ行こうとするのでした。

死を覚悟した三浦之助に、時姫は自らの愛の深さを語り、母の最期を看取ってほしいと引き止めます。母と時姫の間で三浦之助は迷いに迷うのでした。

伊達娘恋緋鹿子

火の見櫓の段

近江国高島家の若殿左門之助が、禁裏へ献上する天国の剣を紛失したため、お守役の安森源次兵衛は切腹しました。

江戸吉祥院の寺小姓となって剣を探す安森の一子吉三郎は、火事で焼け出された八百屋の久兵衛の娘お七と恋仲となっています。お七は、恋人の吉三郎が切腹しなければならぬ原因となった天国の剣の所在を、今宵中に知らせたいとあせります。

思いあぐねて町々の木戸を開くために、火あぶりの刑を覚悟で禁制の火の見櫓の半鐘を打ち鳴らすのでした。

絵本太功記

尼ヶ崎の段

光秀の母・皐月は謀反人となった我が子が許せず、家族の元を離れ、尼ヶ崎で一人で暮らしています。そこへ、一夜の宿を求める旅の僧がきます。実はこれが、弔い合戦で光秀を討とうとしていた真柴久吉でした。そして物陰には、旅僧の正体を見破った光秀の姿がありました。

旅僧こと久吉が「風呂が沸いた」と母の皐月に知らせます。皐月は一番風呂を断り旅僧に勧めます。旅僧が湯殿に入るのを見た光秀は、「今こそ、久吉を討つ絶好の機会である。」と湯殿へ竹槍を突っ込みます。しかし、聞こえたのは女の泣き声。実は、光秀が刺したのは母の皐月でした。皐月は光秀の罪深さを思い知らせるためわざと我が子・光秀の手に掛かったのです。妻の操も「これ見たまえ光秀どの」とクドキで夫を責め立てます。そこへ、半死半生の十次郎が戦場から駆け込み、父へ退却を進言します。こうした肉親の情愛に触れ、ついに光秀は泣き崩れてしまいます。そして、旅僧から大将の姿に改めた久吉が光秀と対面し、後日の再会を約して両者は別れます。



◆九月十六日

戎 舞

戎さまが、釣竿をかついで庄屋の家へやってきました。庄屋さんはお神酒を出します。盃を飲み干した戎さまは、自分の生まれや福の神であることを話しながら舞い始めます。海の幸、山の幸を前に、みんなの願いをかなえようと、お神酒を飲み、幸せを運でできます。酔った戎さまは、船に乗り、沖に出て、大きな鯛を釣り、メダタシ、メダタシと舞い納めるのでした。おおらかな心を持ち、えびす顔でプラス思考に生きるという幸せの原点が込められています。

傾城阿波の鳴門

巡礼歌の段

十郎兵衛・お弓の夫婦は、徳島の玉木家の家宝の刀を探すため、大阪に住み、十郎兵衛は盗賊の仲間に入っていました。お弓が留守番をしているところに手紙が届きました。追っ手が迫っているとの仲間からのものでした。お弓が夫の無事と刀の発見を祈って神仏に願をかけているところに、巡礼の娘が訪れます。国許に残してきた自分の娘と同じ年頃なので、話を聞いてみると両親を探して徳島からはるばる旅をしてきたという身の上を語ります。両親の名前を聞いてみると間違いなく自分の娘であることがわかりました。今すぐに抱きしめ母と名乗りたい思いを抑え、盗賊の罪が娘に及ぶことを恐れて、国へ帰るように諭します。そしてこのままここにおいて欲しいと頼むおつるを、お弓は泣く泣く追い返します。

おつるの歌う巡礼歌が遠のくと、お弓はこらえきれずに泣き崩れるのでした。しかし、このまま別れてはもう会えないと思い直し、急いでおつるの後を追うのでした。

十郎兵衛住家の段

十郎兵衛が、おつるを連れて帰って来ます。わが娘とは知らず、おつるの持っている金に目をつけ、貸してくれと頼みます。怯えたおつるが騒ぐのを止めようとして、誤って窒息死させてしまいます。おつるを見失ってしまい家に戻ったお弓は、このことを知り涙にくれます。わが娘を殺してしまった十郎兵衛も後悔の涙にむせぶのでした。嘆きのうちにも捕手の迫る気配に十郎兵衛は覚悟を決め、捕手を追い散らすと、おつるの死骸もろとも我が家に火を放ち落ち延びるのでした。

壺坂観音霊験記

沢市山の段

大和国壺坂に住む盲目の沢市は、女房お里の内職のかせぎで、細々と暮らしていました。沢市は近頃お里が毎晩家を空けることに気付いて、お里が不義をはたらいているのではないかと疑います。しかし、実は沢市の目が治るように、壺坂寺に願掛けに行っていたのだと知ります。沢市は女房を疑ったことを詫び、お里の勧めるままに壺坂寺へお参りすることにしましたが、自分と暮らしていてもお里は幸せにはなれないと絶望し、谷に身を投げてしまいます。後を追ってお里も身を投げますが、観音様のご利益で二人の命は救われ、沢市の目も見えるようになるのでした。



人形遣い手

東海中学校
郷土芸能クラブ

保存会役員

浅井多美代	石井 志磨	会長	石井太佳夫
浅井 弘之	井上 景翔	副会長	西村 勝和
池田 路子	片山 梨乃	副会長	中村 育子
石本 鈴代	河村 龍童	書記	尾崎 壽美
大畑 拓人	出口 藍葉	会計	森下 成裕
岡田 文孝	中川 結衣	理事	浅井 洋幸
尾崎 壽美	中村 心	理事	石本 直樹
城山みのり	南部 杏奈	理事	磯崎 篤
谷岡 茂良	西山 葵子	理事	南部 望
出口みさと	濱口 朋美	理事	濱口 信広
中井 勝利	濱口 夢愛	理事	濱口 祐子
中北 純子	濱田 珊瑚	理事	本岡 太一
中原 智美	松井 幸大	理事	安田 美幸
中村 育子	箕浦 哉	理事	山本 富保
南部真奈美	向井海夏人		
濱口 祐子	山中 琉那	顧問	
濱口 幸夫	吉田 優杏	志摩市長	竹内 千尋
前田 佳兵			
三橋千奈美			
箕浦 曉美			
村瀬 好美			
本岡美保子			
森本 泰史			

◎保存会員一同益々精進致しますので、皆様の温かいご支援ご指導の程、宜しくお願い申し上げます。